

よい社会のイメージの特徴に関する研究

○竹内潤子¹・今関仁智¹・井出野尚¹・竹村和久²

(¹早稲田大学大学院文学研究科, ²早稲田大学文学学術院)

キーワード: 多元価値, よい社会, イメージ

Study of image about good society

Junko TAKEUCHI¹, Masatoshi IMASEKI¹, Takashi IDENO¹ and Kazuhisa TAKEMURA²

(¹Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda Univ., ²Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda Univ.)

Key Words: pluralistic value, good society, images

目的

社会への処方的アプローチを考えるにあたって、人にとって望ましい社会の心的構成を測定することは重要な課題である。これまで、社会を評価する際の指標として、経済的合理性といったものがその代表であったが、人の日常生活を鑑みると、価値観は多元的であると考えられる。たとえば、20カ国で価値観についての調査研究を行った Schwartz(1992)は、価値の内容として10のタイプと2つの軸を見出し、価値の構造が普遍的に見られることを示した。このことから、価値観は人それぞれ異なっているが、その価値観には普遍的な特徴があり、人はその中で自分にとっての価値を判断して生活していると考えられる。Schwartzの研究で見出された価値観の特徴は個人としての価値が対象であり、社会に対して抱かれている価値観とは異なる可能性がある。そこで、本研究は人がどのような社会を望ましいと考えているのか、そのイメージの特徴を明らかにすることを目的とした。また、多元的な価値を内包する望ましい社会の表現に当たっては、抽象的で高次の表現として、「よい」という言葉がより適切であると判断し採用した。そのため、以降では「よい社会」と表現する。また、本研究では、価値について共通ではない軸が抽出される可能性が高いため、個人差を反映しやすい測定方法を開発し、用いた。

方法

予備調査として、「よい社会」に対して抱かれているイメージにはどのような価値が含まれているのかを探索的に検討するために、大学生188名に「よい社会とはどのようなものであるか」を自由記述で回答を求めた。その結果、29のカテゴリ(i.e. 安全, 共生, 社会保障など)を見出した。

実験参加者: 大学生12名(男性6名, 女性6名)であり、平均年齢は20.41歳(SD=1.32)であった。

手続き: 実験参加者の自由連想で得られた「よい社会」に関する10個の項目をカードに書き写し、そのカードをコルクボードに描かれた半径30cmの円の中に自由に配置するように求めた。

配置が終わった後、半構造化面接を行った。半構造化面接の内容は、(a)なぜそのような配置にしたのか、(b)内容的にまとまっている部分はあるか、(c)なぜその部分がまとまったと感じるか、(d)上下及び左右の軸を考えて何か意味が見出せるか、であった。以上の方法をコルクボード・イメージ・マッピングと命名した。

結果・考察

実験参加者の示したコルクボード上の配置は、何らかの類似性の高い項目が近接して置かれると考えられるため、複数の項目をまとめて命名するよう教示した。これにより得られたアイテムの集合を、以降では「まとまり」と呼ぶ。まとまりの一人当たり平均出現個数は3.33個(SD=1.03)であった。以下において、各まとまりの内容、及びコルクボード内の上

下左右の位置の持つ意味について考察を行う。

1. まとまり 実験参加者の報告した各まとまりを、心理学を専攻する大学院生及び大学生3名の合議によって表現を統一した。まとまりは、「子ども」に関するものが最も多く、次いで「安全」「共生」「社会保障」「政治」「協調性」「幸福」「自由」に関するものが多かった。「安全」「共生」「社会保障」「政治」「協調性」については、予備調査でも出現回数が上位であり、多くの人が共通に「よい社会」にとって必要な事柄として捉えている可能性がある。「子ども」「幸福」「自由」については比較的幅広い概念であることから、まとまりを考える上で出現しやすかったと考えられる。

2. 布置の意味 各まとまりについて、「幸福」「安全」「ゆとり」に関する内容は中央上部に布置され、「協調性」に関するものは中央に、「政治」に関するものは中央下部に、「子ども」に関する内容は左下に布置される傾向が見られた。また、配置における軸の意味について、上の方に重要度が高いものを置き、下の方に重要度が低いものを置くといった方針や、上の方に複雑で抽象的な内容を置き、下の方に具体的で単純な内容を置くといった方針が複数の実験参加者から報告された。このことから、上下に関しては重要度・抽象度に関しての意味上の軸が存在している可能性が示された。さらに、左の方に時間的に短期的なものを置き、右の方に長期的なものを置くという方針や左の方に現在に関するものを置き、右の方に将来に関するものを置いた、といった報告があったことから、左右に関しては時間に関する意味上の軸が存在している可能性がある。

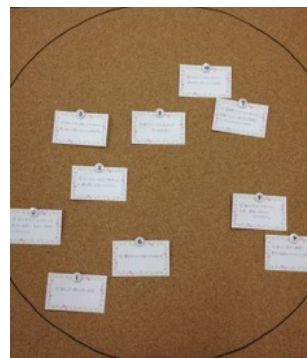


図1 コルクボード・イメージ・マッピングの例

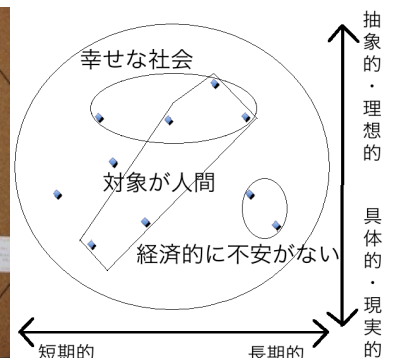


図2 報告されたまとまりと軸の意味の例

引用文献

Schwartz, S. H. (1992). Universals in the content and structure of values: Theoretical advances and empirical tests in 20 countries. *Advances in experimental social psychology*, 25, 1-65.